

第 32 回原子力安全専門委員会定例会
(結果概要)

原子力安全対策課

日時：平成24年7月26日（木） 15時00分～16時00分

場所：福井県庁10階 総合防災センター

出席者：

専門委員：中川委員長、三島委員、田島委員、西本委員、岩崎委員、
飯井委員、泉委員、大堀委員
県：岩永課長、前川所長 他

議 題：

1. 原子力発電所周辺の環境放射能調査報告について
 - ・平成23年度 第4四半期分報告
- 2 発電所の運転および建設状況について
 - ・平成24年3月24日～平成24年7月26日の状況

結果概要：

議題1（原子力発電所周辺の環境放射能調査報告）および議題2（発電所の運転および建設状況）について、次のようなコメントがあった。資料については、次回の原子力環境安全管理協議会にて配付予定である。

<主な質疑>

(事務局からの説明概要)

- ・ 県内発電所からの放射性物質の放出に起因する線量上昇は観測されなかった。
- ・ 浮遊じん放射能の測定結果は、いずれも天然放射能のレベルであった。
- ・ 松葉等の一部の試料から核実験フォールアウト影響によるCs-137に加え、東京電力(株)福島第一原子力発電所の影響と考えられるCs-134およびCs-137が検出されたが、環境安全上問題となるレベルに比べ、はるかに低い濃度であった。
- ・ 大気中水分、雨水および海水から発電所の通常の放射性廃棄物管理放出に伴うトリチウムが検出されたが、環境安全上問題となるレベルに比べ、はるかに低い濃度であった。

Q. 先日、新聞記事でストロンチウムが検出されたというような新聞記事があったが、それは、福島第一原子力発電所の事故に由来するものなのか。

A. ストロンチウムの測定結果については、一昨日、文科省の方で公表されているが、文科省の委託を受けて 47 都道府県が毎月試料を採取し、日本分析センターで測定を行っている。その中で、明らかに福島第一原子力発電所の事故の影響と考えられるものは、10 都県になるが、福井県ではストロンチウムは検出されていない。

Q. 生態系の中で濃縮されていくと思うが、それはどこで監視しているのか。小魚から、中魚、大魚、最終的には人体にたまっていくと思うが。

A. それも踏まえ、どの魚を選ぶかという中で、マダイなどふつうに食事に出される大きめの魚を測っているというのが現状である。そこで、研究としてこういった形で濃縮されていくのかというデータはあるが、我々はあくまで被ばく評価を行っている。

フードチェーンの中でさらに濃縮されるのかという議論になれば、中間層の魚を測るときもある。今のところ、核実験やチェルノブイリの影響と比べれば、低いところで推移しているため、被ばく影響上は問題ないと考えている。

Q. こういった測定は近隣の都道府県でも同じような測定がされているのか。

A. 京都府はもともと（高浜発電所から）10km 圏内に入るため、京都府は同じような形でやっている。滋賀県、岐阜県は（敦賀発電所から）10km より離れており、こういった形の調査は行っていない。

一方で、防災指針の見直しがなされる中、UPZ が 30km に拡大されるため、30km 圏内に対しては、文部科学省が予算措置を行い、線量率を測定するモニタリングポストがつけられ、その運用を開始している。昨年度の四次補正でモニタリングポストの強化が加えられているが、予算成立が 2 月であったため、実際の執行は今年度になっている。

その予算で、滋賀、岐阜、京都もそうだが、線量率の測定については、これまで一道府県 1 箇所のみであったものを、拡大している。放射能調査については、ゲルマニウム半導体検出器を各道府県 1 台ずつ、整備しているが、計画的に測定する体制を整えている。

（事務局からの説明概要）

- ・ 各発電所の状況、燃料輸送実績などについて説明。安全協定に基づく異常事象については、今期間、新たに発生したものはないが、高浜発電所 3 号機の蒸気発生器伝熱管損傷について、対策がまとめられたことから、その内容を説明。

Q. 対策として材質を変更したのか。

A. 材質は変更していない。県内で、この材質を私用しているのは、高浜3、4号機と敦賀2号機だけである。

高浜3、4号機と異なり、敦賀2号機は、製造時に伝熱管を蒸気発生器の管板に密着させる際に、液圧で均一に密着させるが、敦賀2号機は液圧で密着させた後にローラーで一番下の部分だけ押し付ける。敦賀2号機では、これまで損傷が全く発生していない。

高浜3、4号機は、液圧拡管のあとローラーで下から上まで22ステップ拡管しており、どうしても上の部分に応力が残るという状況であり、今回のような損傷が発生している。

これまでの対策として、応力緩和のためにショットピーニングを実施していたが、表層から0.5mmよりも深い部分に傷が進展している状態で、それが成長した場合、今回のように検査で検出される。